

(5) 「くつりて南天阿弥陀仏」

(295)×195×3 061

(1)~(5)は、笹塔婆である。上端は圭頭を呈し、下端は(1)以外破損している。材は、スギ材の柃目である。(1)は、上端に左右二段の切り込みが深く入り、裏面に段がある。下端に釘孔状の孔が三方所確認できる。表面の上半に梵字と蓮の絵、下半に文字三行が墨で書かれていると推定される。(2)~(5)は、上端に浅い切り込みが入り、表面に「空風火水地」を示す梵字と南無阿弥陀仏が墨で書かれている。なお、木簡の釈読にあたっては、山形大学の三上喜孝氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター『服部遺跡・藤治屋敷遺跡第二次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書一九、二〇〇四年)

(高桑弘美)



秋田・古川堀反町遺跡
ふるかわほりばたまち

- 1 所在地 秋田市千秋明徳町一丁目
- 2 調査期間 二〇〇五年(平17)三月~七月
- 3 発掘機関 秋田県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 山村 剛・菊池 晋ほか
- 5 遺跡の種類 武家屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(秋田)

古川堀反町遺跡は、秋田市街地の中心部に位置し、久保田城外堀の西側にあたる。今回の調査は、秋田中央警察署改築事業に伴うもので、調査面積は一六九〇㎡である。

遺跡の名称にもなった町名は、城下町建設期に堀替えをし、現在外堀となった旧旭川(古川)沿いにあることに由来する。江戸時代を通じて、家老職小野岡氏や根本氏をはじめとした上・

中級藩士が生活をしていた。先に実施された東根小屋町遺跡や久保田城跡、藩校明德館跡などの調査と同様に、湿地帯を埋め立て、造成を繰り返していたことが判明し、『御国替当座御城下絵図』（秋田県公文書館蔵）や、当時の文献史料を裏付けることとなった。

検出遺構は、掘立柱建物・柱列・井戸・溝などである。遺物は、陶磁器・木製品・金属製品と多岐にわたる。木簡は、土坑SK八一四から五点、SK八二五から三点、SK六八三・八九四から各一点、柱列〇三P二から一点、江戸時代の造成土中から六点、計一七点出土した。およその時期は、遺構内出土のものが一八世紀後半から一九世紀中頃、造成土出土のものが一七世紀後半から一九世紀中頃と思われる。

8 木簡の釈文・内容

SK八一四

- (1) ・「小野岡大和様
菽三斗入壹俵 三梨村」
220×45×8 011
- ・「小野岡大和様
大豆三斗入壹俵 三梨村」
220×45×8 011
- (2) ・残銭三貫文 同人分」
・助五郎様」
(233)×210×2 019

- (3) ・「。川上嘉兵衛様御分粉米式斗入
寅□□□□老斗入」

・「。上亀町 組代九郎左衛門

210×470×10 011

- (4)

153×97×26 065

- (5)

(188)×79×10 065

SK八二五

- (6)

315×30×8 061

出羽秋田住人□□^{〔門カ〕}之□□

天保□□□□

315×30×8 061

- (7)

〔南部雲三〕

径93×厚7 061

- (8)

「 仰信寺
醬」

径105×厚5 061

SK六八三

- (9)

〔□□□□□□□□〕

(150)×64×8 061

SK八九四

(10) ・(左三巴紋) □



(99)×(26)×3 081

SAO三P二

(11) 「東ノ一」

157×35×25 011

造成土中

(12) 「糯米川井五郎兵衛様 三原新田村

御屋□□

長左衛門

326×27×5 051

(13) ・「□□□大町

。上町

長谷川

91×37×7 011



(1)



(2)



(3)



(14)

(14) □吉原□□

(158)×32×4 051

(15) 「□春て 候 □」

245×14×13 065

(16) 「嘉兵様」

径88×厚7 061

(17) □□ □□

径(268)×厚12 061

(1)は釘孔があり、付札の類か。「小野岡大和」は文政四年(一八二二)頃の城下町の様子を描いた『御城下絵図』には、遺跡と推定される地にこの人物の名が見える。また「三梨村」は、現在の湯沢市三梨である。(2)は上部を破損する。下端を尖らせており、何かに挿し込む形態で使用された可能性がある。(3)は釘孔があり、付札の類と思われる。「上亀町」は、久保田城下の町人町に存在している。(7)(8)(17)は小樽などの蓋である。

(6)は上部が山形に削られているが、丸身を帯びる。下部が削られて尖っており、何かに挿し込む形態で使用された可能性がある。秋田や天保といった地名や年号が確認できる。(4)(5)(9)は樽や桶などの木製品の一部である。(10)は上部、両脇とも破損を受けており、文字の並びも不明である。(11)は上部に錆化した釘が刺さり、下部は破損して失われている。建築材の一部か。

(12)は釘孔があり、付札の類と思われる。寛文初年(一六六二)頃

の城下町の様子を描いた『御城下絵図』には、遺跡と推定される地にこの人物の名が見える。また「三原新田村」は、現在の横手市睦成三原である。(13)は上部と下部に釘孔があり、付札の類と思われる。「大町」は久保田城下の町人町で、現在も地名が残る。(14)は上部を破損する。下端を尖らせており、何かに挿し込む形態で使用された可能性がある。

(15)は上下両端を臍状に加工し、全体を朱色で塗装しており、何かの部材であったと思われる。(17)は蓋であり、半分は欠損している。

9 関係文献

秋田県教育委員会『古川堀反町遺跡』(秋田県文化財調査報告書四三五、二〇〇八年)

(山村 剛・菊池 晋(秋田県教育庁))